



日下部直起展 ～静かな刻の中で～

と き／10月28日(火)～11月2日(日) 12:00～7:00PM

ところ／ギャラリーヒルゲート

京都市中京区寺町三条上ル ☎075-231-3702

ギャラリーヒルゲートでの個展は2年おきに開催して、今回で13回目となります。アンティークなモチーフの静物画が中心ですが、それと合わせて自分が住んでいる京都の大原野の風景とイタリアの風景とのどこか共通点を感じた風景画など、60号～小品までの油彩27点、および水彩画10点の合計37点を出品予定しております。京都でも西の山あいである大原野の地に暮らし、ここの静かな空気の中で、遥かなイタリアに思いをはせ、毎日犬と散歩する風景を今回初めて描いてみました。大原野で育てたアーティチョークとイタリアの骨董市で手に入れたモノたちがと呼応する会場になればと思っています。

日下部 直起

日下部 直起 Naoki Kusakabe

1959 京都に生まれる

1982 金沢美術工芸大学油絵科卒

1987 二紀展初入選以後毎年('93 奨励賞、'96 優賞、'97 二紀賞、'99 同人優賞、'01 宮本賞、'02 損保ジャパン美術財団奨励賞、'05 会員賞、'11 会員優賞、'15 委員推挙)

1995 東京セントラル美術館油絵大賞展 佳作賞

2000 伊豆美術祭展 (IZUBI) 佳作賞 ('01 佳作賞、'02 佳作賞)

2000 2001 文化庁現代美術選抜展、前田寛治大賞展

2004 文化庁芸術家在外研修 (フィレンツェ) 損保ジャパン美術財団選抜奨励展

2006～2010 LIONCEAUX 展 (日本橋三越本店))

2013、2015 La luce nel tempo 3人展 (フィレンツェ、Luzart Gallery)

2018 La luce nel tempoIII 3人展 (フィレンツェ、Accademia delle Arti del Disegno)

2020 個展 (阪神百貨店梅田本店)

Proposte dal Giappone 展 (ミラノ、Galleria Schubert)

個展 (日本橋三越本店) ('12、'18、)

われらの地平線展 (日本橋三越本店) ('13、'14、'16、'17、'18)

2022 個展 (名古屋栄三越)

2023 個展 (福岡三越)

現在 二紀会委員 ヒルゲートでは13回目の個展

<https://www.kusakabenaoki.com/>



「朝のパントマイム」 53×136cm 油彩



「天使の戯れ」 30F 油彩

日本デビュー 30周年記念 ディーン・ボーエン展 ーオーストラリアの大地と空とそこに生きる私たちー

と き／11月9日(日)～12月14日(日) 1:00PM～6:00PM

ところ／ギャラリー宮脇 (月曜休、祝日の場合は翌日)

京都市中京区寺町通二条上ル東側 ☎075-231-2321

2023年夏から群馬と徳島の県立近代美術館を巡回し、今秋は八王子市夢美術館で開催された同名タイトルの展覧会が、作者の日本デビュー30周年を記念してギャラリー宮脇で開催される。90年代に版画の実力作家として活動を始めたディーン・ボーエン (1957年オーストラリア生まれ) は、大阪国際版画トリエンナーレ1994及び1997で特別賞を連続受賞。94年の受賞作の「父と息子」は全体の赤黒さが印象的で、日焼けした人物像の背景に太古の岩絵のような自動車が積み重なり、果てしなく広がる地平線をハリモグラが歩くという、オーストラリア独特のインスピレーションに溢れた作品であった。



「父と息子」銅版画
67×89cm 1993年



「ラヴバードとテントウムシの家族」
水彩画 24×38cm 2025年



「愛の家」ブロンズ彫刻
21.5×17.5×9.5cm
2019年

その翌春にギャラリー宮脇で日本初個展を開くと、この南半球の新人アーティストの風変わりな作品は多くの人を魅了した。

30年が経ち、ボーエンは今では巨大な絵画や彫刻も手がけ、母国を代表する人気作家になった。本展では大型油絵やブロンズ彫刻を含む美術館巡回展出品作を多数展示し、最新作水彩画も発表する。



「ハリモグラの通り道」
油彩画 122×183cm 2021年

★11/9(日)午後3時～来日歓迎レセプション開催。作家・寮美千子によるボーエンの絵本の朗読パフォーマンス (本邦未完の作品を日本語で) とボーエンのサイン会を行います。(要予約)

第332回 書画まつり

と き／11月15日(土)～11月24日(月・祝) 10:00AM～6:00PM
ところ ガラリー鉄斎堂(会期中無休)
京都市東山区新門前通東大路西入ル梅本町262 ☎075-531-6164



この度、第32回書画まつりを開催させて頂きます。江戸時代から昭和末迄の日本画を中心に1万円から500点余りを展示即売させていただきます。



鈴木松年「鬼念仏」

屏風も多数展示しております。沢山の中からお気に入りの作品と出会っていただけるものと思います。また弊社ホームページでも全作品をご覧いただけます。

主な出品作家

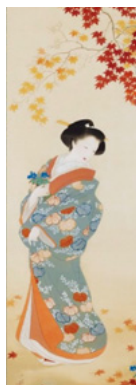
古画より－浦上玉堂、山本梅逸、森狙仙、岸岱、岸良、岸連山、鈴木松年 他

新画より－竹内栖鳳、富岡鉄斎、橋本関雪、都路華香、福田平八郎、土田麦僊、小野竹喬、堂本印象、池田遙邨、山口華楊、伊藤小坡、秋野不矩、伊東深水、中川一政、三岸節子、棟方志功 他

道具より－楠部弥弼、永楽即全、三浦竹泉、徳田八十吉、今泉今右衛門、藤田喬平 他



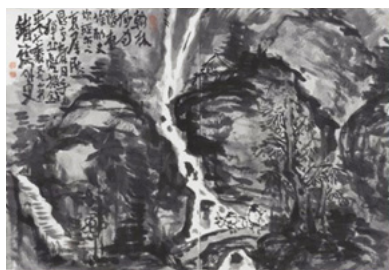
秋野不矩「赤かぶら」



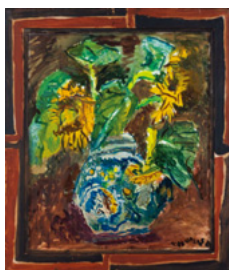
伊藤小坡
「紅葉狩」



岸連山「龍虎双幅」



富岡鉄斎「水墨山水」



中川一政「向日葵」油彩



真葛香山「漁舟香炉」

深田充夫展 Aqua

現代彫刻家が信楽焼で表現した「水」のかたち

と き／11月18日(火)～11月30日(日) 11:00AM～6:00PM
ところ／アートギャラリー博宝堂(月曜休廊)
京都市左京区岡崎神宮道東側 ☎075-771-9401

私は数年に渡り、アクアをテーマに様々な「水」を陶彫で抽象的に表現してきました。今回のアクアは水の波紋や渦などの自然の力による動きや曲面の美しさ、水面に映る色彩を湖国滋賀の伝統的な焼物である信楽焼を使い、より身近な空間で「水」の存在を感じられるよう花器という造形で表現しました。

是非、私の感じる水の形を体感頂けたら幸いです。 深田充夫

※陶彫作品約20点とペン画も数点出品予定

深田充夫 略歴



淵然

- 1956 滋賀県に生まれる
- 1978 京都精華短期大学立体造形専攻科卒業
- 1983 第3回ヘンリー・ムーア大賞展 美ヶ原高原美術館賞受賞
- 1993 第1回フジサンケイ・ビエンナーレ 現代国際彫刻展 特別優秀賞受賞
- 2000 丸の内仲通り彫刻展(三菱地所、箱根彫刻の森美術館選定)／東京都
- 2003 京都造形芸術大学美術工芸学科 非常勤講師(～09)、紺綬褒章受章
- 2004 第8回KAJIMA彫刻コンクール 金賞受賞
- 2016 滋賀県文化賞受賞
- 2021 秀明文化賞受賞／MIHO MUSEUM
- その他、国内外で個展多数開催



気



静淵

About time Sarah Moon 展 サラ・ムーン

と き／10月23日(木)～2026年5月10日(日) 10:00AM～6:00PM
ところ／何必館京都現代美術館(祝日以外の月曜休館) ※冬季休館12/29～1/6
京都市東山区祇園町北側 ☎075-525-1311

このたび「About time Sarah Moon 展」を開催いたします。

何必館・京都現代美術館は、これまで約25年に亘りサラ・ムーンの活動を見守り、交流を深めて参りました。今回、何必館において約10年ぶりとなる4度目の展覧会は、これまでの信頼関係によって実現したものです。「私を突き動かすのは、いつも予期しないこと」というサラ・ムーンは、その直感力と綿密な方法論によって独自の世界を表現します。不確かな既視感を留める情景には、写真家の視線にある「儚さ」の感情が息づいています。今回は、何必館と共同企画・編集した、5冊の写真と童話による物語「CIRCUS」「梟」「赤い糸」「人魚姫」「黒ずきん」を写真作品と映像作品を交えて紹介します。また、当館館長の梶川芳友との私的な対話から生まれた、書と写真による歳時記「儂-HAKANAI」も合わせて展覧いたします。

現在、世界において益々評価が高まるサラ・ムーン。この機会に是非ご高覧ください。

記念出版

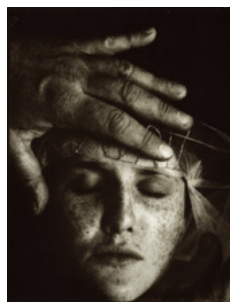
「Sarah Moon 写真集」	7,000円
「Sarah Moon 梟」	18,000円
「Sarah Moon 赤い糸」	18,000円
「Sarah Moon 12345」	30,000円



「The Screech Owl」
2003

サラ・ムーン略年譜

1941年 フランスに生まれる
1970年 写真を撮り始める
1983年 個展、国際写真センター、ニューヨーク
1995年 回顧展、国立写真センター、パリ
2002年 「過ぎゆく時」何必館・京都現代美術館
2004年 「CIRCUS」何必館・京都現代美術館
2008年 ナダール賞受賞、フランス
2016年 「Sarah Moon 12345」何必館・京都現代美術館
2025年 エコール・デ・ボザール 大賞受賞
「About time Sarah Moon」何必館・京都現代美術館



「The Red Thread」
2004



「About time」
2001

—サムホール展— 岸 満男 個展

と き／11月25日(火)～11月30日(日) 11:00AM～6:00PM
ところ／ギャラリー唯
京都市左京区岡崎神宮道東側 ☎075-752-0348

油絵具を描いて、画廊歩き、美術館通いと、絵を描く意欲を増幅させて50年余り、表現の動機として油絵を愉しんで参りました。

都会育ちの小生は、時として海見える風景に憧憬を抱き、モチーフを灯台と決めて写生旅行を開始しました。日本列島全国134基の灯台スケッチを現場で描くことに徹してきました。激しい破風に曝されて、屹立している孤独な建物の灯台。先人たちが選び選んだポジションをこの位置ならではと得心し、心ゆくまで周りの海を眺めている。やがて光や風など自然から受けるイメージに惹きつけられる構図を見つけ、感動して自由に描写してきました。

カンヴァスに着色グラウンドを演出し、フィンガー&ペインティングナイフなどでインパストし、グレイジングした色彩と技法を探索していく。自己表現を海の広がりや空の写りからポジションを探る。描くことそのものが楽しく、描き眺めていると、時として過去のロマンを秘めた郷愁が呼び覚まされる。灯台は人生の道標のようであり、未来に進む勇気を与えてくれ、夢と期待を投影する存在としてキャンパスに蘇る。

ここに自分自身(1932年生)の大きな区切りとして、元気で油絵を愉しんで来られた事を喜び、感謝いたしまして「石造・デザイン灯台」「重文・恋する灯台」など、新しく描いたサムホール28点の作品による個展を開催いたします。創作の意欲の源泉を是非ご高覧ください。

岸 満男



「伊良湖岬灯台」愛知県伊良湖岬



「石崎灯台」
北海道利尻島



「出雲崎日御崎灯台」
島根県出雲市(需要文化財)



「栄浜崎灯台」
北海道利尻島



「鍋島灯台」香川県
坂出市与島(重要文化財)

〈没後50年記念〉企画 The Great DOMOTO 一堂本印象の家族たち一

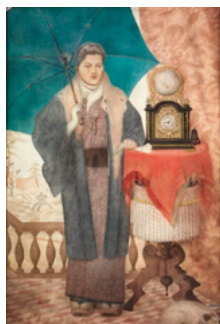
と き／10月9日(火)～12月21日(日) 9:30AM～5:00PM
ところ／京都府立堂本印象美術館(祝日以外の月曜と、休館)
京都市北区平野上柳町26-3 ☎075-463-0007

御所の近所で江戸時代から続く造り酒屋の三男として生まれた堂本印象(1891～1975)には、8人の兄弟妹がいた。長兄の寒星は古典芸能評論家、次兄の漆軒は漆芸家、さらに印象の義弟には、森守明、三輪晃勢ら日本画家、そして甥には洋画家の堂本尚郎などがおり、まさに類まれなる芸術一家。本展は、印象没後50年を記念し、芸術に携わる一族の作品を紹介している。印象が描いた家族の肖像や、家族をモデルとして制作された作品を通して、画面の深層に身近な人々への温かな愛情が込められていることが感じ取れる。華やかに見える堂本一族だが、印象10代の頃に家が没落したため、印象は学校を出ると一家の大黒柱となって家族を養った。それ故、弟妹たちは生涯にわたり、芸術の道に専念する印象を支えたのである。

今回は特別に、亡き母の菩提を弔うため、印象が72歳の時に自ら彫った阿弥陀如来坐像が初公開されている。また、妹と姪をモデルに描いた《婦女と卓子》は、東京・歌舞伎座より久々の里帰りとなった。甥にあたる堂本尚郎が洋画家に転向する前に描いた日本画も初公開となる。



堂本印象「ある家族」1949(昭和24)年
堂本印象美術館蔵



堂本印象「故父」
1924(大正13)年
堂本印象美術館蔵



堂本印象《婦女と卓子》
1950(昭和25)年
株式会社歌舞伎座蔵



堂本尚郎「「蚤の市」」
1954(昭和29)年
堂本印象美術館蔵

没後50年 堂本印象、自在なる創造

と き／10月7日(火)～11月24日(月・休) 10:00AM～6:00PM
ところ／京都国立近代美術館(休日以外の月曜と10/14、11/4休館)
京都市左京区岡崎公園内 ☎075-761-4111



《交響》
1961(昭和36)年
第4回新日展
(堂本印象美術館蔵)

堂本印象(1891～1975)は、1918(大正7)年に京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)に入学し、1920(大正9)年には西山翠嶂が設立した画塾「青甲社」に入門して日本画家として研鑽を積んだ。1919(大正8)年の第1回帝展に初入選。第3回帝展では《調鞠図》が特選、第6回帝展では《華嚴》で帝国美術院賞を受賞するなど官展を中心に活躍し、一躍画壇の花形となった。その後母校の教授として、また私塾東丘社の主宰者として多くの更新を育てた。細密な具象画を持ち味としていた印象は、60歳を過ぎて渡欧した後は抽象的な作風へと移行し、躍動感のある筆のストロークで表現した抽象画を完成させた。1950(昭和25)年に日本芸術院会員、さらに1961(昭和36)年には文化勲章を受章。1966(昭和41)年には自らデザインした堂本美術館を衣笠の地に開館、1975(昭和50)年に83歳で没した。

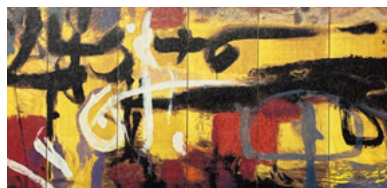
堂本印象の没後50年を記念して開催される本展は、官展出品作などの代表作を中心に画業を振り返る大回顧展であり、京都画壇のみならず全国的に名を馳せた印象の全貌に迫る。



《木華開耶媛》
1929(昭和4)年
第10回帝展
(堂本印象美術館蔵)



《詞梨帝母》
1922(大正11)年
第4回帝展
(京都国立公園近代美術館蔵)



《風神》1961(昭和36)年(堂本印象美術館蔵)

[illegible]

